
傷物語【影】

輝きのブライト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

傷物語【影】

【コード】

N6102Z

【作者名】

輝きのブライト

【あらすじ】

水無月「この物語は、「影法師」の俺と暦が春休みに出会った、ある金髪の吸血鬼との思い出であって、俺がある意味人間を敵にしちまった、懺悔のような話であり、そんな俺を傍に置いてくれることを約束してくれた最愛の金髪の吸血鬼との惚気話でもあって、現在へと繋ぐ話でもある。」

「永遠なんていわないけど、お前の傍にいたい」

しゃどーヴァンプー1 (前書き)

この物語は、最近、パスワードを忘れて化物語(次)の続きである偽物語(次)の続きをかけなくなってしまうた作者により書かれています。傷物語(双)の作者である、Brandon様を作者はリスペクトしており、少々内容が被っているかもしれませんが。」

しゃどーヴアンプ01

「ミナちゃんって、阿良々木くと仲良いよね」

「いや、そんなことはナツシングだ、羽川ちゃん。俺はヤツと意識を共有しちゃまっていて、なおかつ基本的にヤツの影から出れないため、とてつもなく不便だなんて思ったことは全然無い。むしろ、俺を曆マツだと間違っ奴が居るが、どうかしてるぜ。どうみても違いがあるだろ、違いが。身長とか身長とか。しかし！たまに菓子パン買ってくれるのが嬉しくて仕方ないぜ！」

「・・・やっぱり、仲良いじゃない。」

「「よくない！」」

・・・以上が弟、曆とその同級生であるメガネ委員長・羽川翼との会話である。

このあと、メロンパン買っていたいただきました。

美味しかったです。

さて、影法師かげほうしってヤツをご存知だろうか？
簡単に言うなら、まあ、影かげだ。

俺もまた、その影法師という怪異の一人(?)。

というか、未だに話す影なんて見たことが無い。

俺は阿良々木暦とかいうヤツ（まあ、弟だけどな）の影に潜んでいる。

潜んでいることに色々事情がある。

気にしないで欲しいな。

また機会あれば、誰かが話してくれるに違いないから。

こうして、今俺が居る場所こそが『弟・阿良々木暦の影』だ。

ヤツの中学生時代の悪評は全て俺のせいである。

残念なやつめ、へっへっへ。

器物破損（主に相手の自転車とかな。あとは………忘れ
た）。

暴行（主に、防衛な。絡まれたときと言うか、胸倉つかまれたとき
だけです。ホントだから。ね？信じれくれよ。信じてえ〜〜〜

傷害罪（上に同じ。便利だよなー、これって）。

まあ、こうして暦の身体にたまりに入れ変わらせていただいて、ヤ
ツの悪評を大きくし続けている。

故意じゃねえけどな（どつちだよ！）。

ていうか、普通見間違えるものなのかねえ？

まず、俺は曆マツより身長が12cm高い（曆は165cm。晒しぢゃおーっと）。

アイツの体にどんな影響を与えているかなんて、そんなの俺には関係ない。

よく、「身体検査のとき、入れ替わってくれえー！」なんて言われるけど、正直言います。

オメー、馬鹿かと。

いくらなんでも、怪しむだろうよ。

短期間に身長が妙に高くなってしまったら（ヨーロッパ人であるまいし）。

だが、残念なことに基本的に俺を「引っ張り出す」権限はヤツにある（「戻る」権限は俺が持ってまーす。うへへへ・・・！）。

めんどくせーよな、ホント。

まあ、でれねーこともないんだけどな。

ヤツの影の範囲だけなら。

「お前、出れるんかい！！」なんて突っ込んではいけない。これが、結構狭いのだ。

本編ほんへんでのさながら、あの金髪の吸血鬼のように。

これから話すことは、あんまり褒められたことじゃない。

というか、誇れることでもない。

これは、曆アイツの影に潜んでいることしか出来ない、臆病者でチキンで
どうしようもない、「影法師」かげぼうしなんていゆー怪異の俺の昔話。

そして、俺がはじめてユーレイ的な存在ではなくなつて、「誰かの
大事なナニカ」にしてくれた、俺の主人にして愛しい金髪の吸血鬼
の物語である。

しゃどーヴァンプ02

「暦のばーか。何故に俺にメロンパンかメロンパンかボン・デ・リ
ングをかわなんだ！」

「そうは言ってもな、兄ちゃん。僕にも財布事情あんと言つものがある。
よって、その控訴は破棄させていただく！」

「だが、断る！」

これは、本屋の帰りのマイブラザー・ギャルゲーキングとの会話で
ある。

「ギャルゲーキングって誰だ、馬鹿兄。」

だが、同級生のスカートがひらりとめくれたのをガン見して、その
描写をことごとく原作で鮮明に描写しているような、変態さんには
言われたくないのである。

「地の文でいいいたい事言うな！」

「くそっ……」

こうしてみると、長身で赤いカッターシャツにだらしなく黒いネク
タイつけたチンピラが背の低い高校3年生と話しているようにしか
見えないだが、これでも兄弟である。

だけど、一つ違う点があるとすれば。

ヤツの影に鎖で繋がれた番犬のように俺が暦の影に縛られている。

「……ところで、暦よ。例の品は？」

「はっ。殿、こちらでございます。」

と、暦が出してきたのは紛れもなくスーパーで売っていた人類最高至宝たるチョコチップメロンパン（180円）。

しかも、くしゃくしゃ。

「メロンパンだー！！！！」

「だが、兄ちゃんにはやらん！」

暦は人類最高至宝たるチョコチップメロンパンを開け、もしかもしや食べ始めた。

俺の目の前で。

しかも、やたらと美味しそうに。

「……死んでしまいたい」

「あなたは身長177と僕の双子の兄かよ！？……なんて突っ込みたくなるほど身長が高いのに、そんなこと言っなよ！？」

なんてことを言っていたら。

声が聞こえた。

「そのうぬ、血をよこせ」

「えっと、兄ちゃん？」

猟奇殺人事件の死体のようなものを俺は見ちまったというのに、それは、とてつもなく美しかった。

世界中の何処を探してもいないような、絶世の美女だったのだから。滑らかで長い金髪。

シックなドレスはボロボロ。

四肢は分断されており、切断面が嫌でも見えてしまう。

右腕の肘の辺り。

左腕は肩の付け根。

左脚は膝の辺り。

右脚だけは切断部分が無く、鋭利な刃物で切り裂いた後があったが、他には引きちぎった後があって、全然統一性が存在していない。

なのに、俺は呟いてしまった。

明らかに人間でない、ソイツに。

「綺麗、だ・・・」

「兄ちゃんが綺麗なんて言うって、珍しいよな。まるで、世界を面白無さそうに見てる目してるのに」

それはお節介にもほどがあるといえよう。

「うぬじゃ。そこの背の高いの。儂を助けさせてやる」

みよーに偉そうな口調で、瀕死状態だというのに彼女は言う。

まるで、獲物を見る獅子のような目で俺と暦を見ながら。

だけど、俺は見た。

彼女に影が無い事を。

「えーっと、そうだ、救急車！」

「そんなモンはいらんわ。うぬらの血をよこせ」

「我が名はクスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレード。鉄血にして熱血にして冷血の吸血鬼じゃ」

犬歯をむいて、彼女は笑ってみせる。

吸血鬼。

古今東西、あらゆる創作で有名な吸血鬼が何故こんな田舎町に居るのだろうか？

「うぬの血を寄越せ。我が血肉として飲み込んでやろう。じゃから、寄越せ」

暦は携帯電話（京セラのヤツ）を取り出し、電話をかけようとする。そして、チラリと傷口の詳細が見えた。

そう、生物学的に不可能なことが目の前にあったのである。

出血が、全くと言っていいほどなかった。

「兄ちゃん。」

「分かってる。変わるんだろ？」

俺と暦は精神的にも身体的にも『影』と言つ名の鎖を通して、密接に繋がっている。

だから、影に居る俺が暦と入れ替わることだってできるのだ。

「ようやく、分かったか？取るに足らん人間ごときが血肉となれることを光栄に思え」

空気マンマンかよ。

ついていけねーよ、美人さん。

ヤツが俺の存在に気づいたのはヤツが6歳のとき。

『そのときから既に友達が居ないスキル』を発揮していたヤツは俺に気づいてしまったのである。

早いもんだよな、ホント。

両親と火憐ちゃんかれんと月火ちゃんつきひが俺に気づいたのは、それから6年後。

結構、待たされていたものである。

そのときまで、暦の独り言だと思っていたらしい。

ドンマイ、暦。

ドンマイ、俺。

俺は暦の意識の中に潜り込む。

本来の俺は背が高いので、少し窮屈だったが、俺の存在そのものが『不安定で幽霊のようなもの』なのでキツさとかは関係ないのだが。

家族に気づかれてから、俺達は一段と仲良くなった。俺は名目上、『いないこと』になっているので、学校に通ったことは無い。だけど、たまに出てきて俺はヤツの成績を上げてやったりしてる。

たまに、新記録出しちまうこともあったりするが（人間の範囲でだけ）。

入れ替わりが完了すると、俺は勢いよく走った。

「来てねーか？」

「来てないよ。」

チラリ、とヤツのエロ本が見える。

クソッ、シリアスも糞もあつたもんじゃねえな。

「死ぬのはいやだ、死ぬのはいやだ。消えたくない、なくなりたくない……！やだよお！誰か！誰か！誰か！」

周りが静寂と化しているため、嫌でも俺の耳に入っちまう。

思い出しちまうじゃねえか、昔のことを。

暦は言う。

金銭無所持の俺に何かを買って欲しいと頼むかのように。

「少し変わってくれ」

「ああ。」

そして、暦が「シャバ」に出て俺はいつもどおりに「影」へと引込む。

いつも通りのことだ。

俺はアイツの「装備品」のようなもの。

アイツは俺のことを羨ましがるけど、俺のほうが羨ましい。

「個人」として認めてもらえるあいつが。

「血はどれくらい、居るんだ？」

「うむ。うぬ一人くらいで足りる」

「それじゃ、僕が死ぬよ」

俺は曆に語りかける。

俺に代われ、と。

「よオ。阿良々木　　ってゆーヤツだ。」

「妙に偉そうなやつが出てきたな……。二人居るのか？」

いつものことだ。

俺が名乗ろうとすると、名前だけ抜けている。

未だに父さんにも母さんにも名前でも呼んでももらえない。

いつも、「お兄ちゃん」だけだ。

火憐ちゃんには「にーに」、月火ちゃんは「ヤン兄（ヤンキー兄貴の略らしい）」と呼ばれる。

大体、この位だろう。

俺を認識できているのは。

でも、彼女は違った。

家族でもなんでもない他人だというのに、俺を認識、できていた。

「そんなもんなんじゃねえのかな？」

「まあ、いいや。俺の血を飲め」

「え？」

彼女は驚いた顔をする。

それもそうだ。

さっき、逃げたやつが突然帰って来て、そんな事を言い出したら。

「兄ちゃん！」

「黙れ！たまには、我儘言わせろ」

俺は吸血鬼に近づく。

傳くようにして、俺は首を差し出した。

「ずっと、暦が羨ましかった！誰かに「個人」として認識されたかった！ヒーローにもなりたかった！でも、俺みてーなヤツじゃ無理っぽい。ああそうさ、次に生まれ変わったら、ヒーローにもなつてやるし、俺みてーなヤツが誰かに認識されるよう、足掻けるようになつてやる！次は、次こそは、・・・主役になつてやる。」

「なにいつてんだよ、兄ちゃん！」

暦の静止を聞かず、俺は吸血鬼に言う。

「だから！俺の血を吸え！」

「・・・あ、ありがとう」

か細い声が聞こえた気がした。

次の瞬間、俺の首元に鋭い二つの痛みが走る。

走馬灯のように蘇るは、両親と妹達と・・・そして、弟^{こよみ}。

一番惜しかったのは、あの金髪の吸血鬼の笑顔が見れずに死ぬことだった。

しゃどーヴァンプ03

あれから、暦は家に帰れただろうか？

月火ちゃんと火憐ちゃんはどうかだろうか？

「起きろ、従僕。」

回想に浸る前に俺は起こされてしまった。

暦でなければ、縁も所縁も無さそうな少女だった。

金髪は見た感じサラッサラだ。

あー、撫で回したい。

「何を考えておる、さつきから・・・」

蹴られた。

呆れたような顔をする少女に、回し蹴りとドロップキックを喰らってしまいました。

「考えるって言ったってなあ・・・」

俺は辺りを見回してみる。

辺りは夜だったはずだ。

しかも、こんな廃墟には電気はないはず。

なのに。

なんで、俺には見えているんだ？

そして、脇で俺を心配そうに見ている金髪幼女に問いかけてみる。

「気分はどうだ？」

「まあまあじゃな。この身体は中身がスツカスカで、非常用の体と言ったところじゃからのう……。というか、早くうぬには手足を取り返してもらわねば……。」

ビクッ、と驚いたのを隠すかのように、金髪幼女は腕を組み、唸る。

しかし、ヤツの姿がないな……。

「おい、従僕。」

「なんだよ。」

「僕のことは、ハートアンダーブレードと呼ぶが良い。」

「すまんっ！そこまで、俺人の名前おぼえれない！だからさ、キスシヨットでいいか？」

申し訳なさそうに俺は手を合わせる。

「そ、それなら仕方ないのう！……まあ、あのような時じゃった

し、キスシヨット呼ばわりも許してやるとしよう。・・・ただし、うぬだけじゃ」

何故か焦りだすキスシヨット。

つか、キスシヨットはまずかったかな？

外国の名前はよく分からないケドさ。

うーむ、可愛いな。

「え？ああ、そっか。俺、吸血鬼になっただよな・・・」

両手を見る。

刃のように長い爪。

そして、自分でも分かったのは八重歯が伸びているということだ。

チラリ、と俺は黒い裾が目に入った。

「なあ、キスシヨット。この黒い半袖のコートはなんだ？」

「ああ、それか。儂もきこうと思っておったところじゃ。何故か、うぬを我が眷属にした途端、うぬのその服を覆うかのように、現れたのじゃ。吸血鬼の物質創造スキルというわけでもないようじゃが、どういう仕組みなんじゃ？」

それはこっちが聞きたい。

俺だって、分かんないのだから。

しかし、ブランド物みたいだよなー。

この半袖真っ黒コート。

「・・・で、キスショットの手足を奪ったのはどんな奴らでどこに居るんだ？」

「向こうは吸血鬼専門のプロフェッショナルじゃ。こちらが出向けば、向こうが勝手に探してくれるじやろう。・・・やってくれるな？水無月^{ミナツキ}」

「み・・・なんだって？」

「うめの姓名はどうでも良いとして、うめに名をくれてやる。あのとき、うめは俺に名乗ろうとしていたけれど、名乗れなかったのじやろっ？」

キスショットは座り込んだままの俺に優しく微笑みかける。

まるで、俺の事情を知ったような表情で。

「まあ、そうだけど・・・まず、苗字はあっても名前はなかったからさ。ずっと、二人称でしか呼ばれたことなかったし・・・」

「じゃから、俺がつけてやった。名の意味は『水面に映る月のように美しいけれど、そこに無く掴み取ることが出来ない』。・・・正直、あのときのうめにときめいてしもうたわ。どうしてくれる、我

が従僕。」

キスショットの言いたいことはわかる。

自分のために、手足を取り戻せとっているのだ。

返事は一つしかない。

「御意。我が主」

キスショットに言われたとおり、俺はその辺をフラフラとしていた。

十字路に差し掛かったそのときだった。

正面。

右。

左。

それぞれを三人の男達が立ちふさがっていた。

見上げるような長身にカチューシャが特徴的で、二本の波打つ大剣
フランベルジェを両手に持った男。

ドラマツルギー。

キスショットの右足を奪った、ヴァンパイアハンター。

どこか幼く、俗に白ランと呼ばれる物を来てベビーフェイスが特徴的だが、肩に担いでいる巨大な十字架がそれら全てを打ち消している。

エピソード。

キスショットの左足を奪った男。

他の二人とは違い、武器を持つてはいないが、ハリネズミを思わせる髪型と神父風のローブが特徴的な男。

ギロチンカッター。

キスショットの両腕を奪った男。

「
」

「ドラマツルギーさん、現地の言葉でお願いしますよ」

「むっ、すまない」

「つか、コイツがあの子の従僕か？なんか、嫌な予感しかしないな・・・」

こいつ等は、俺のことを全く見ていない。

まるで、『取るに足らない』と言いたげに。

「つか、どうすりゃいいんだ……？」

キスショットは吸血鬼退治の専門家と出くわした後、どう戦えばいいのかわせてくれなかった。

次の瞬間、俺の目の前に地面が大きく割れていた。

「ありゃ？刺さってねーのかよ、マジ受ける。」

「エピソードさん、なるべく早く終わらしましょう」

「それもそうだな。」

近づいてくる、三人。

クソッ、何も出来ねえのかよ……！

振り下ろされる十字架。

振り落とされるフランベルジェ。

思わず目を閉じた。

だが、それらは一切振り下ろされることは無かった。

「こーんな、街中で物騒な物振り回すなんて元気いいなあ」

片足でで十字架を。

中指でフランベルジェを挟んで。

薬指でフランベルジェを挟んで。

「・・・何かいいことでもあったのかい？」

俺を助けたのは紛れもなくアロハを着たオッサンだった。

しゃどーヴアンプ04

そのとき、俺は何があつたかよく理解できなかった。

とりあえず、言えることがある。

目の前に立つアロハは紛れもなく、ありがちな同属殺しの吸血鬼でもなく、キリスト教のある部隊のメンバーでもないということだ。

「・・・なんなんですか、貴方は。」

神父風のローブを纏うハリネズミの印象を持たせる男、ギロチンカッターは訝しげに言う。

そこだけ同調してやらんこともない。

なんなら、俺の菓子パン食うかい？

・・・ないけどさ。

「忍野メメ。怪異の専門家であり、こつちとあつち、ネコシエーターを繋ぐ交渉人であり、バランサーかな。」

見上げるような大男、ドラマツルギーはフランベルジェを上げ、ベビーフェイスで白ランを着たエピソードは十字架を戻した。

「ほほう。では、そんな貴方が僕達に如何様なんですか？」

「ちょっと、僕としても見過ごせなくてね。キスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレードの眷属であり、その中で最も

特殊なケースたる『彼』とはいえ、一対三はいくらなんでも卑怯なんじゃないかい？」

「・・・」

俺をチラリと見つっつ、忍野はギロチンカッターへと問いかける。

まるで、諭すかのように。

しばらく、黙り込んだと思ったらギロチンカッターは口を開いた。

「貴方の目的は何ですか？」

「バランスを取ることだよ。そうだね、この子を僕の宿泊する場所に送り届けたら、交渉しようか」

「交渉？」

「そう、交渉。君たちにとっても、彼にとってもプラスになる交渉だ。聞いて損はないと思うよ？まあ、僕は強制したりはしないけどね」

エピソードは何か言いたげで、ドラマツルギーは沈黙を護っていた。

ドラマツルギーに関しては、常に黙りなれているようにも見える。

エピソードは何か言いたげだけれど、場の雰囲気を感じ取り、口を出すべきではない、と黙っているのかもしれない。

わかんないけど。

「良いでしょう、乗りますとも。では、またこの場所で」

そういうと、ギロチンカッターは他の二人を引き連れて去っていった。

僕はつい、尻餅をついてしまった。

「はは、気圧されてしまったかい？影法師くん。」

「・・・ッ!？」

「どうしてそんなに怖い目をしているんだい？元気いなあ、なにかいいことでもあったのかい？・・・君はどうして、分かった？と言いたげだね？そりや分かるさ。さつき、三人の中に割り込んだ理由だって、君の気配を察知したからでもある。あと、君がハートアンダーブレードと居た廃墟は僕が紹介しておいた。そうそう、君の弟くんは家に帰しておいたよ。しつこく食い下がってきたけどね」

忍野（敬語で読んでいいのか分からない為、あえて呼び捨てに決定）はどこか見え透いたかのように淡々と述べていく。

というか、一度にそんなに多くいわれても分からないけどな。

「どうして、分かったんだよ・・・？」

「理由としては、君の影だよ。」

忍野は僕の影に指を指して続ける。

「通常、吸血鬼の眷属になっちゃった人間は影が無いはずだ。だけど、影法師たる君にはそんなことは関係ないからね、影があるんだろっ」

「影法師？妖怪みたいなものか？」

「妖怪ねえ。僕は怪異と呼んでいるけれど。まあ、そんなもんだ。影法師ってのは、『操り師』と呼ばれる人間に寄生して、通常は10歳くらいで覚醒する。ほら、君のその半袖のコート。それが影法師の特徴でもあるんだ。影法師には『存在感』がない。まあ、どっちかっていうと人形みたいなものだね。いわば幽霊のようなものであり、怪異であり、人間でもあるから、『存在感』がないし、人間の影にも入ることが出来る。だから、ハートアンダーブレードは君を眷属にしたんだろっねえ。」

忍野の話は俺を『兄』として暦が認識した時の暦の年と4歳遅いけど、おおかた似ている。

キスショットが指摘した俺の半袖コート。

これにはどんな意味があるんだろっ？

「キスショットは知っているのか？このこと」

「ファーストネームで呼んでいるのかい？仲良いんだねえ。ここで話すのもなんだし、帰ろっか？」

「……どこにだよ？あ、名乗り忘れた。俺は阿良々木水無月だから」

・・・我ながら失礼な自己紹介だと思った。

後悔してからじゃ遅いけどな。

「・・・なんか、女の子みたいな名前だね・・・。決まっているじゃないか、あの廃墟だよ。そうそう、あと君の弟くんを追い払ったセリフも言わなくちゃね」

なんていうか、性格が悪いヤツだ。

あと、キスショットが付けてくれた名前に文句いうな。

あの廃墟に着いた。

ここまでの会話をして、俺は一つ結論付けなくてはならないことがある。

とりあえず、忍野はさん付けしなくていいことが確定した。

そりゃあ、らんま二分の一の話題を振られるとは思ってなかったさ。

アロハ着たおっさんに。

「おお！小僧に水無月！帰ったか！」

「ただいま、キスショット」

キスショット（幼女ver）は俺に抱きつきながら、頬擦りしている。

言うておくが、俺はロリコンではない。

「・・・水無月くん、君は幼女に抱きつかれる趣味でもあるのかい？」

「ねえよ！つか、付き合ってるんだよ！いいじゃねえか、それくらい！」

「・・・なるほど、ロリコンなんだね。」

首をかしげ、キスショットは言う。

「・・・ロリコンって、そんなに否定するものなのか？？」

「・・・今後のこともあるから、そのことを話し終えてからキスショットに教えてあげよう。」

俺のゴカンにかかわるし。

しゃどーヴァンプ04（後書き）

いかに、水無月を馬鹿に書くか。
そこが課題です。

馬鹿の書き方、あれば教えてください！><

しゃどーヴァンプ05

「・・・てか、これ本当に効果あるのかね？」

俺は首から下げた星型の首飾りを手で掴む。

どうやら、コレを<影星>^{かけほし}と言う曰く付きのものらしいのだが、しやれっぽく聞こえるのは気のせいだろうか。

現在、ドラマツルギーにキスショットの左足を返してもらったために暦の学校に向かっている。

『それがあれば、君は弟君の影に戻ることができるだろう。まあ、君次第だけどね、戻る戻らないは』

そんな感じに言っていた。

まるで、俺に戻りたいといわせようとするかのような言い草で。

理由としては、『ミナヅキくんは眷属になってからそんなに経たないし、地の利だけでもあった方がいいと思ってね』だそうだ。

暦の影の中にいたり、暦と入れ替わることくらいでしか俺は学校に行ったことはないけど、暦の身体を通してなら俺は学校に行ったことにあることを忍野は知っていたのだろうか。

「阿良々木、くん？」

電柱に差し掛かったとき。

眼鏡をかけて三つ編みと言う、昨今のアニメのキャラクターでは絶滅危惧種のような格好の暦の同級生がいた。

名前はわかんないけど。

「違うか、身長高いし。・・・えっと、貴方は誰？」

そりゃ、納得するわな。

俺、一応双子なのに暦より身長高いから、家族もすぐ見分けがつかます（スタンド的じゃないならねー、出れるんだよなあ、それが）。

「・・・名乗ったほうがいいか？」

あえて、ぶっきらぼうに。

そうそう、影がないことをばれないようにしなきゃ。

「うん、なんとか気になるし。あと、阿良々木くん、さっき会った時怒ってたけど、どうして？」

「えっと、どっち？」

「じ、ごめん！弟の方だよ」

慌てて彼女は訂正する。

うむ、可愛い。

彼女いるけどね！。

「阿良々木水無月。どう呼ぼうが勝手だけど、暦と仲良くしてくれよな？アイツ、友達いないから」

ニイ、と俺は八重歯を剥き出して笑ってみせる。

余裕のシルシってやつである。

「は、羽川翼です。えっと、」

どこか、羽川ちゃんは顔を赤くしていたけど、ドラマツルギーとの約束をすっぽかすのはいくらなんでもまずすぎる。

俺はその場を走り去り、直江津高校へと向かった。

直江津高校にて。

そこには、俺とよく似たシルエットとカチューシャ付けて巨大な二本のフランベルジェを持つ男、ドラマツルギーがいた。

吸血鬼の視力で見ると、……曆だった。

なんか話している。

「お前、本当にあのハートアンダーブレードの眷属か？ 妙に震えているが」

「何を言っているんだ！ 僕はお前が襲った吸血鬼の『けんぞく』だよ！」

声が震えている。

つか、身体も震えてんじゃねえか。

無理すんじゃねえよ。

俺に比べて運動神経はボンジン並しかねえのにさ。

つか、忍野、アイツは簡単には引き下がらないぜ？

なにせ、阿良々木曆正義の味方だからな。

主に名前を付けてもらつまで名前が無かつた俺とは違う。

正真正銘の、個人だ。

だからよ、オメーがヴァンパイアハンターに阿良々木俺様無月騙る必

要なんて全然ねんだ。

「ドラマツルギー！その眷属たア、俺のこつた！」

「・・・なんだ、こいつは偽物か。まあ、良い。分かりきっていたことではあつたが」

「・・・ッ！」

暦が歯を食いしばっているのと対照的にドラマツルギーは至って冷静。

俺は吸血鬼の脚力で校門のフェンスを越える。

そして、少しずつドラマツルギーの方へと歩いていき、ドラマツルギーの正面に立った。

「兄ちゃん！なんで、なんで来たんだよ！？」

「うるせえ！これは俺と俺の彼女主人の問題だ！てめーは羽川ちゃんに謝ってる！」

俺に怒られると思っっているのか、暦の声は上ずっている。

まあ、いいや。

たとえ、誰に嫌われようと、暦に嫌われようと俺はやることをするだけ。

「いいから、こっから出やがれ！あと、フェンス登る時は人に見ら

れないよう気をつける!」

曆は黙ってその場から走り去った。

「・・・偉く弟思いなのだな、お前は。一つ問おう。私の仲間にならないか?」

「弟思いだア?びびられてるだけだぞ、俺は。ならねーよ、俺は。なんで聞く?」

こーゆー時の感だけは冴えている。

そついう血筋なのかな?

しらねえけどさ。

「いや、眷属になったばかりであるお前なら同志にすることが出来ると思ったのだが・・・。まあ、良い。始めようとするか、ハートアンダーブレードの眷属よ」

終始、口をあまりあけずに喋るヤツだ。

腹話術でも使ってるのかなえ。

すると、途端にドラマツルギーは俺にフランベルジエを振り下ろす。

「つと!?!なにするんだよ!」

かろうじてサイドステップで避けられたけど、ドラマツルギーの返事はない。

そつえば、此処にくる前に忍野が何か言ってた気がする。

『影法師つてのは、影を武器とすることができんだ。カタナだろ
うと、大鎌だろうとね。まあ、後はその<影星>を使ってみてよ。
僕には使い方が分からなくてね、どうしたものやら』

つまり、俺は影を武器とすることができはずなのだ。

何度も何度もドラマツルギーはフランベルジェで突いてくる。

何回目の突きだろうか。

フランベルジェの切っ先が俺の右肩に深く突き刺さる。

ドラマツルギーは勢いよくフランベルジェを引き抜くと、俺の右腕
はぼろん、と伸びたゴムのようにな動かなくなった。

「……………ッ！」

すさまじい痛みが俺の右肩に走る。

だけど、そのすぐ後にその痛みは消え、元に戻る。

このまま、同じことを繰り返さなければいけないのだろうか？

いや、違う。

そして、思い出す。

俺には『必殺技チート』があることを。

俺は目を瞑り想像してみる。

白刃取りする『シーン』を。

「対抗策は無い様に見えるな、ハートアンダーブレードの眷属よ。
しかし、目を瞑っては私の攻撃は見えないぞ？」

ご親切に有難うよ。

俺はニヤリと笑う。

そして、小さく呟く。

対抗策なら、あるとな。

だって、白刃取り『出来ていた』から。

影が作り上げた、真っ暗な地面から生えている二本の腕が俺に振り下ろされんとするフランベルジェを受け止めているのをみて、ドラマツルギーはさすがに驚きを隠せないようだった。

「なんなんだ、それは・・・」

そして、その影を消失させ、ピザをカットするアレみたいなカタチの先が星型になっている刃物を作り出し、（どっちかっていうと、死神の鎌？）勢いよく振り上げる。

すると、ドラマツルギーは両手を上げる。

「どついうことだ？ドラマツルギー」

「お前のその奇妙な力とハートアンダーブレードの眷属としての力で振り下ろされると敵わん。なんなら、許してくれ、降参するといえれば良いのか？」

相変わらず無表情のドラマツルギー。

俺は無意識にも頭をカリカリかいていた。

「もう一度聞こう。私の仲間にならないか？」

「めんどくせーな、同じ事いわせんや。仲間にはならねーよ、俺はキスショットが好きだから」

「わかった。左足はあの男に返しておこう。そうか、ちなみに私は元々は人間だ」

「はあ！？聞いてねーぞ、おい！」

その意味について暫く考えてわかった途端、ドラマツルギーの姿はなかった。

「……とりあえず、左足ゲット」

廃墟に帰ると、キスショットは起きていた。

「水無月、少し遅かったのでは？」

「……勝ったからいいだろ？」

「それもそうじゃな」

キスショットはベッドの代わりを果たしている机から降りて、俺のほうまでやってきた。

そして、先ほどの戦いについて俺は話した。

「なあ、キスショット。ドラマツルギーって、人間だったのか？」

「まあ、そうじゃな。儂やうぬよりは回復力が少ないからのう、その判断は賢いな」

「ハートアンダーブレード、水無月くん。ただいまー」

のんきな声とともに現れた忍野は片手で成人女性の左足を持っていく。

なんか、すげえ光景……。

そして、キスショットに渡した。

猟奇事件の女の右足を持つ、幼女が食い始めた。

右足を。

俺にみられていることに気づいたのか、キスショットは俺と忍野に指を指して不満げに言った。

「レディーの食事は見るでないっ……」

しかも、顔赤い……。

とりあえず、俺と忍野は廊下に出た。

「知ってるかい、吸血鬼の吸血には二種類あるんだ。一つは食事、もう一つは眷属を作る方法だ。もし、君を助けることを選ばなかったら、彼女はあんな姿にはならなかったらうね」

唐突に忍野は煙草を啜え（火は点けていない）、話し始める。

「え？じゃあ、俺のせい、なのか？」

「そうともいえるさ。だけど、彼女のことを責めてはいけない。アレでも必死で看病してたんだぜ？」

そういえば、覚えがある。

起きた時、隣で寝てたし（俺の腕を枕に）。

「そっなのか……。」

「おい、入ってきていいぞ」

キスショットの声がしたので、教室に入る。

大きくなっていた。

気づかぬ間に。

じゃぶーむまんぷろ6 (前書き)

ちよっと、長引くかもしれません><

今回はキホン、惚気です。

じゃーどーマンP06

「そういえば、阿良々木さんと委員長ちゃん来てたよ」

キスショットにエピソードとの対戦について、良い案を聞くべく話していたところ、忍野は何の前触れもなく言い出した。

委員長ちゃん……って羽川ちゃんか!?

「おいっ!?!ソレ、かなり重要なことだぞ!何故、言わなかったし
」!

「……いや、君寝てたし。」

そういえばそうでした。

俺、今吸血鬼なのでした。

キスショットはと言うと。

「ああ、来てたのう。……ところで、水無月。少し来い」

「……?」

言われるがままについていくと、廊下に連れ出された。

外見年齢12歳くらいの幼女に。

「なあ、水無月。うぬ、俺のことを彼女彼女言うてるが、俺で良

いのか？」

どこか、心配そうなキスショット。

俺がキスショットを彼女だと一人で先走って言っているせいで、怒ってるのかな？

「いやいや、そのようなことではない。」

「じゃあ、なんだよ？」

「ひとつ気になっていたことがあってな。」

そういうと、キスショットは廊下に置き去りにされたままの机の上に座る。

俺はと言うと、従僕じゆふくだから座っちゃいけない気がして、ヤンキーすわりのような状態でキスショットを見上げるような姿勢だ。

キスショットは気分をよくしたのか、話し出した。

しかも、割と真剣な表情で。

「うぬ、俺の何処が好きじゃ？」

「全部。どんな状態だろうと、愛せる自信がある」

「俺がドロドロになっても？」

「あたりめーだ。どんな感じだろうと、俺はキスショットが好きだ。」

「じゃなきゃ、俺はここにはいないさ。」

「!!!!!!!!!!!!」

顔が真っ赤になってるキスショット。

可愛いなー、ほんと。

「俺のことは？」

「なんていうか、その、騎士様ナイトじゃなーと、思う。・・・それでいて、可愛い所もある。」

キスショットはもじもじしながら、俺に顔を近づける。

凄惨な笑みを浮かべて。

「そうじゃなあ、もしもお前の耳を食いちぎる、と言ったらお前は
どうする？怖いか？」

「怖くねえよ、全部捧げるさ。耳も目も唇も。なんなら、身体その
ものをくれてやってもいい。・・・だけど、人生だけは全部取らな
いでくれねえか？弟こよみとか妹達かれんとしきひとかを護ってやりたいからさ。」

これは、俺の願いでもあり願望でもあり欲望である。

可愛くて強くて綺麗な彼女。

オレノダイジナモノ。

ずっと前から欲しかった、タカラモノ。

願いが叶わないなら、叶えてやるまでだ。

そんなことを考えていた時期もあった。

欲しいものの全部を。

エピソードと戦う前とはいえ、これは言うておかなければならない。

キスショットの反応はと言うと、突然、俺の耳に噛み付き、食いちぎった。

そして、そのままムシャムシャ噛み砕いて飲み込んだ。

左耳は何もない状態となったが、吸血鬼としての回復力のおかげか、すぐさま再生した。

俺が何か言う前に、キスショットは俺の目を抉り取り、またも牙で噛み砕く。

もちろん、痛みはあるさ。

でも、嬉しくて仕方ない。

愛する人に抉られていることが。

最後にキスショットは唇を重ねた。

食いちぎることも無く、ただ普通のキス。

「どっじゃ？僕のキスは」

「ファーストキスだったけど、すげえワイルドなんだな、キスショット。」

実際はワイルドどころではない。

正直、吸血鬼じゃなかったら今頃猟奇殺人事件の死体になってるな、俺。

「今はコレだけじゃ。・・・続きは、僕の手足を全部集めてからじゃぞ？」

「ああ、分かってる。」

「水無月くん、時間だよって・・・、ええ！？」

忍野が凝視してる。

そんなに羨ましいのかい？

キスショットががつつくように俺の目とかを抉りつつたりして、

ファーストキスを奪われているというこの俺が。

しゃどーヴァンブーフ

「エピソードはヴァンパイア・ハーフなのじゃ。」

「ヴァンパイア・ハーフ？」

ヴァンパイア・ハーフ。

それは、あらゆるメディアで有名になった。

ただでさえ、俺はこの力の使い方が未だにわからないというのに（吸血鬼の力。影法師は・・・微妙なライン）、彼はどのような半生を送ってきたのだろうか？

「まあ、良い育ちはしなかったじゃろうな。」

俺の表情を読み取ったかのように、キスショットは淡々と返した。

まるで、自分には関係ないと言いたそうに。

「勝てばいいだけじゃ。あまり無駄なことを考えぬよう、な」

キスショットはそれだけ言うと、俺に抱きついて、そして机で作ったベッドの上で眠りについた。

ふと、着信を見てみる。

.....300件着ていた。

一つは暦（一件だけ。さつききたっばい）、他298件は・・・携帯もたされてないけど、今のパソコン使ってる我が愛しの妹、月火ちゃんでした（残りはなんと、火憐ちゃん。兄弟全員からメール着てる。フッファー！）。

火憐ちゃんと月火ちゃんのは後で見よう。

とりあえず、暦からだ。

『兄^{あん}ちゃんへ

辛くなったら、僕を呼んでくれていい。月火ちゃんも火憐ちゃんも力になるから』

・・・全く、お前はどこの英雄^{ヒーロー}ですかっつての。

ジョーダン・プロット (前書き)

八話です。

しゃどーヴァンプ08

「ほう、やっと来たか」

幼さの残るベビーフェイス。

俗に言う白ラン。

そして、

ヴァンパイア・ハーフ。

エピソードはグラウンドの中央なんの兆しも見せず、姿を現した。

虚空から姿を現したかのように。

あの巨大な銀塊ぎんかいのような、巨人のアクセサリーのような十字架を携えて。

「最初は驚いたね。なにせ、あのドラマツルギーの旦那を下したんだろ？どんな武器を使ったのかと思ったら、素手じゃねえか。超ウケる」

超ウケるが口癖なのだろうか？

というか、現地の言葉を心がけるとは言われてたけど、そこまで連発するものでもないぜ？

白ラン。

「残念ながら、能ある鷹は爪を隠すつてことわざがある国の出身な
んでね、持ってたとしてもお前にはみせねーさ。」

俺は無論、肩をすくめて見せる。

ここは、威張るべき所だ。

「お前、吸血鬼についてどう思う？」

「はあ？何をいきなり。」

エピソードは巨大な十字架を肩に携えたまま、往復する。

右往左往。

「・・・聞けよ。ドラマツルギーの旦那が言つてたんだが、お前は
吸血鬼であるハートアンダーブレードのことを好きだと言つたそ
うだが、お前は人間だつたんじゃないのか？」

怪訝そうな表情でエピソードは俺を見る。

人間、か。

「ハッ、そんなの知つたこつちやねえよ。まず、俺が人間つて言つ
自覚がねえんだからよ。」

それは、今の俺の誇り。

人間でもなく、怪異でもなかった、かつての俺。

それが、どんなに辛かったことだろうか。

「むしろ、オメーが羨ましくれえだよ、エピソード。オメーは少なくとも、『なんでもない』時期なんかなかったんだから」

「ハア？何言つてやがる」

エピソードは相変わらず、怪訝な表情だ。

その反応は当然のことか。

それが、 フツの反応だ。

「さっさとはじめようぜ」

面倒くさそうに頭を掻く。

それもそうかな、当然の反応だ。

「……………後遺症が残らない程度に殺してやるから、すぐ終わるに決まっているけどな」

それだけ言うと、エピソードは俺に向かって銀塊としか言いようがないカタマリを投げてきた。

ああ、しらねえのか。

コイツも。

「伸びる。」

たった一言。

一言だけで、俺の武器は現れる。

「君はある意味有利なんだよ。」

忍野はそう言った。

「どーゆー意味だよ？」

「君は伝説の吸血鬼、キスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレードの眷属であり、怪異を刈り取る死神のような怪異の中でただ一人しか存在しない孤高の存在、『影法師』かげほうしでもある。通常、影法師は形を持ったものを作り出すことが出来ない。だけど、吸血鬼の物質創造能力を持つ君にはそんな常識すら覆せる。今の君なら、世界を滅ぼす事だって可能じゃあない。それでもしないのは、やはり主人が愛おしい^{お姫サマ}からかな、影法師くん。」

見透かしたかのような口調で忍野は言った。

まあ、そーゆー捉え方もあるかな？

現に俺はキスショットが大好きだし？

銀塊が俺に当たろうとした瞬間、ピザを切るアレみたいな形の武器が現れた。

それは、初めて俺が出した時より、巨大だった。

鉄骨の半分の長さの柄。

大きめのマンホールの蓋の二倍は軽くありそうな、その武器を握り、俺はその武器を振り回す。

見事、柄に当たり俺は銀塊を弾き飛ばした。

「な、なんだよ・・・、それは。ピザカッターじゃねえか！」

驚いたような素振りを見せ、エピソードは渾身らしき突込みをかます。

甘いつ！

キレがないっ！

だが。

「え！？アレ、ピザカッターって言うの！？いや、知らなかったし！」

「アレ、たぶんだがピザカッターって言うんだよ！分かったか！」

漫才みたいな掛け合いをしながら、飛んできた銀塊の十字架をキャッチし、エピソードと俺はチャンバラもどきを開始。

まあ、お互い目がマジなだけだな。

こっちはキスショットの四肢が。

向こうには、仕事と私情と・・・あー、なんたる。

「もう、良いですよ。エピソード君。」

「・・・ッ！」

エピソードの顔が途端に青ざめる。

あの子のエピソードと、だいぶ違う表情だ。

「てめーは……」

「おめーはギロチンカッターより狂ってるかもしれないねえ。まあ、せいぜい頑張りな」

ソレだけを言うと、エピソードは姿を消した。

声の主は少しずつ、姿を現す。

ハリネズミを思わせる髪型。

神父風のローブ。

右手には暦を。

左手には羽川ちゃんを。

ドラマツルギーの二本のフランベルジェのように、エピソードの銀塊のような十字架のように。

右手、左手。

それらで暦と羽川ちゃんの首を絞め上げている。

まるで、「こよみ」弟と知り合「羽川ちゃん」いで武装するかのようだ。

「ギロチンカッター・・・！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6102z/>

傷物語【影】

2012年1月6日17時53分発行